

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	ATS(American Thoracic Society)International Conference 2018 in San Diego
別タイトル	ATS (American Thoracic Society) International Conference 2018 in San Diego
作成者 (著者)	南條, 友央太
公開者	東邦大学医学会
発行日	2018.09.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 65(3). p.147 148.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2018 027
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD38199718

ATS (American Thoracic Society) International Conference 2018 in San Diego

南條友央太

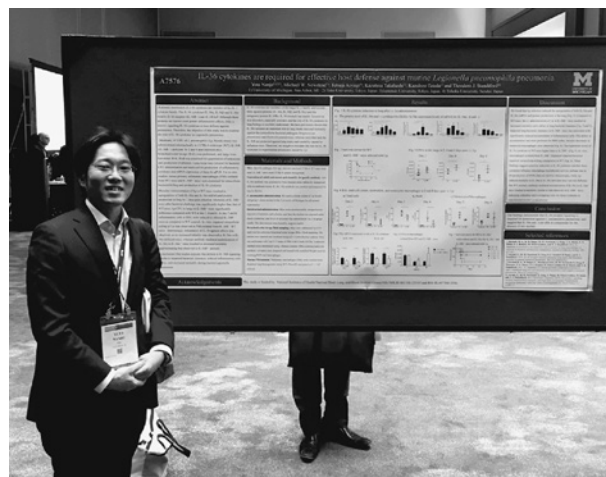
東邦大学医学部微生物・感染症学講座



2018年5月18～23日に米国サンディエゴで開催されたATS (American Thoracic Society) International Conference 2018へ参加してきました。ATSは呼吸器領域での世界最大規模の学会の1つであり、1905年にワシントンで始まって以来、今回で114回目になります。参加者も1万5000人前後で、日本からも多くの施設から呼吸器科医が参加しています。2016年10月から2018年4月までミシガン大学呼吸器・集中治療科に留学していましたので、学会中はボスや同じラボの仲間と会って話すことができ懐かしく感じました。さらには、ミシガン大学呼吸器科のAlumniも学会に合わせて開催され、私の留学よりも以前に所属されていた研究者とも交流ができ、とても有意義でした。

学会の開かれているサンディエゴは、カリフォルニア州の南端、メキシコとの国境に接しており、メキシコの雰囲気を感じ、青い空の似合った街です。しかし、学会中は曇りの日が多く、この時期にしては珍しく雨も降っていました。街はコンパクトにまとまっており、空港も近く、学会会場のコンベンションセンターを中心にホテルやレストランが多数あり、どこに行くにも便利な都市でした。

セッションは同時に複数行われており、コンベンションセンターだけではなく、隣接するホテルでも行われているため、全てを把握していくことは不可能です。そのため、私は呼吸器感染症と宿主免疫分野での発表を中心に聴講してきました。なかでも非結核性抗酸菌症は海外でも大きな問題となっており、比較的多くのセッションがあり、これらのセッションは多くの人が集まって熱心に聴講していました。また、午前中のセッションにはYEAR IN REVIEWというセッションがあり、1年間でインパクトのあった論文を紹介してくれるものです。かなり内容が濃く、聞き取れないことが多々ありますが、事前に冊子を配布してくれ



ポスター前で、著者。

るので、セッション後に復習もできます。

今回、私はIL-36 Cytokines Are Required for Effective Host Defense Against Murine Legionella Pneumophila Pneumoniaというタイトルで発表してきました。これは、近年発見されたIL-36サイトカインが呼吸器感染症で宿主に対してどのような影響を与えるのか、マウスモデルで検討したものです。RAPID ABSTRACT POSTER DISCUSSION SESSIONというセッションに当たり、これはあらかじめポスターとは別にスライドを用意して、90秒で要点を説明し、その後小グループでDiscussionを行うものでした。英語を苦手とする私には、かなりハードルの高いもので、このセッションにあたってしまった自分の不運に嘆いていましたが、いざ発表すると多くの研究者が私の研究に興味を持っていただき、多くの質問を受けました。

Discussion 終了後には、座長からもちょうと答えられてたし良かったよとの言葉をいただき、英語ができないから前に出ることを躊躇するのではなく、失敗してもいいから前に出ることの重要性を感じました。

最後になりましたが、研究に関してご指導、ご支援いた

だきましたミシガン大学呼吸器・集中治療科の Theodore J. Standiford 教授、そしてミシガン大学への留学からこの発表する機会を与えていただきました舘田一博教授、石井良和教授に感謝申し上げます。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2018-027